

文のしおり

## 明石のうらつと

### 播磨路の日記

関西大学図書館 手紙を読む会

#### 一、はじめに

幕末期、河内国花園村（現東大阪市）に歌人、国学者として知られた岩崎美隆（号を藤門また杠園という 弘化四年七月歿 享年四四）がいた。彼は地域の作歌活動グループのリーダーでもあった。その旧蔵書約二八〇点（一、七八二冊）が現在図書館に収蔵され、『岩崎美隆文庫目録』（『五弓雪窓文庫目録』と合刻）も刊行（昭和五十一年）されている。収蔵書は刊本約六〇〇冊、写本約一、一八〇冊からなり、写本の殆どは美隆の手写に係る。

こうした手写資料の集成が『藤門雑記』七三冊であり、同じく『第二藤門雑記』の三一冊、そして『第三藤門雑記』二冊、その他『杠園雑記』等である。以下に翻刻する二種の紀行文は、この集成に収められたものである。

明石のうらつと（村田嘉言編著 賀茂翁消息と合綴）

播磨路の日記（荒木美穂著 藤門雑記第五冊所収）

村田嘉言（嘉永二年歿 享年未詳）は歌人にして画家。村田春門の長子である。春門がしばしば美隆の家に出向き古典、和歌を教授した関係から、嘉言は美隆と親交があった。

荒木美穂については殆ど分からないが、美隆の門人で花園村津原神社の神職荒木美蔭（明治元年没 享年未詳）の一族であるまいか。

今の所、前記目録に収める『袋草紙』の奥に「天保十三壬寅年四月以延宝年刊之写本一校了 岩崎美隆荒木美穂」と見えるのが、二人の関係を示すすがなののである。

なお、関西大学図書館手紙を読む会のメンバーは、以下の通りである。

森川 彰（助言者）、大國克子、池尻孝子、長谷章子、八尾奈緒美、瓢野由美子、中川敏子、田中純子、鶴飼香織

#### 二、翻刻

翻刻については、次の要領に従った。

- ・漢字は、原則として常用漢字に改めた。
- ・仮名は、原則として片仮名及び平仮名を用い、変体仮名は平仮名に改めた。
- ・踊り字はそのままにした。
- ・本文には読点を施した。
- ・本文の字数、行数はスペースの関係で原形に従えない所が多く、よって歌は二行書きとし、作者名をその下に入れ、他は追込形式とした。



〔明石のうらつとの首部（賀茂翁消息と合綴）〕

天保七申年八月

明石のうらつと（村田嘉言編著 岩崎美隆写）

葉月廿三日 足穂、義秀にいさなはれていてたつ、北野を過て野さとのワ  
たりにふねまつほと、

も、くさの花のにしきの絶間行

秋の野さとのワたしふね哉 嘉言

ゆく川のつ、みのを花ほにいて、

ふねまつ人のそてかとお見る 足穂

舟にのほるほとからるとなく声をおくりて、

秋のたのほむけの風にさそはれて

わたりそめたるかりの一つら 義秀

ことうらの社にて、

うたふへきひとふしもなしことうらの

かミの御前にぬさハつけとも 嘉言

とふと打いてたるに、

もみちはのあやある君かことのはを

うけひかすやハことうらのかみ 足穂

武庫川にて、

さ、れふむむこ川きよし時もよし

いさおりたちてかちわたりせん 嘉言

つねハ水なき川なれとこのひころの雨にて水なほあり、ゆきく〜てひとむ  
らのしけみあるをゆひさして、あれハおかしの宮としもいふ也と義秀かを  
しゆるに耳とまりて、おかしとハいかにかくそとふにしらすといふ、さ  
らハ里人にとてたつぬれと、なほおなしさまにかしらかきつ、押何と  
かきはへるを、跡のもしハわすれにたりといふもわりなけ也、されと押と  
かくといへるにてかるきおもしなることしるかりけり、そも〜おかしと

いふ事田中道麻呂かおむかしのいふかりたるよしいへるを、鈴屋翁もうへなハれたるを春海、久老などハかけるふの日記の、つゝしのをかしからましといひつゝけたるを証哥にして、かんなりたかへりともときあけつらハれたるより、やうく翁のをしへ子すらおもきをもしにかきあらためなとすめるハあいなきことなるに、此社の御名しも押といふもしならハいさ、かよりところあるこゝちす、

いつハあれと秋をハときとみやの名の

おかしと神もみそなハすらん 嘉言

又岡田社ともいふとそ、其夜ハ義秀がしるへなる今津のさとの何かしかもとにやとる、

廿四日 芦屋の里なる蒲田績は早くよりしれる人なれハ道ゆきふりに、

へた、れるおほつかなさもたひ衣

おもひたちてそはるけられける 嘉言

とおとろかしたるにとりあへす、

あしやかたうちよる波のたまくも

つまかみるめをかるかうれしさ あるし

なとよみかハすを、

あしやかたなミくならぬいそふしの

みえてゆかしききみかことのは 義秀

せちにと、めらるゝにもたしかたくためらふほと、浦風につれてあひきのごゑおとろおとろしくきこゆるに、いてさらハあないしはへらん、今ハことなりぬへしとてそゝのかさるゝに、さすがにみまほしく行て見るに、けにもいそきはにひきあくるほとにて、いはしといふ魚のひとつにまるかれ、あみのなかにひかりあひたるさまめもあやなり、あるじハこよるきのいそならねと肴もとめてなにくれと心しらひしつゝ、

つのくにのなにハおもへと心なき

あまのみなれハせんすへもなし あるし

かへし

あひきするあしやのうらのあま衣

一重にけふハたのしかりけり 嘉言

海のおもてハかゝみのことくなみしつかにて、西はすま、明石、兵庫、西宮、南ハ紀路の山々、東ハなにハの大城より川口のさまこまやかに見えて、みるめにあまれり、

あしやかたなミのうねくまほひきて

なにハのみにきほふも、ふね 嘉言

あしやかた立いて、見れハしらなミの

ほてうちつれてかよふも、ふね たりほ

とかくするほどゆふつけてしほ風さむし、今ハとてかへるさ道のへのをミなへしをたをりて、

かへし

こゝろあるきみにとハれてけふのミハ

しをれしそもかわきぬる哉

かへし

かわくてふきみがことはのつゆにしも

中々われハさしくまれけり

こハ此はる、花のさかりもまたて家刀自のよをはかなくせられしをかたりいて、しめりかちなるをりなり、家にかへりてもまた酒さかなともてはやさるゝに、よのふくるをもしらて所につけたる題を設てわかちよむ、

芦屋擣衣

秋さむくなたのいそわの月ふけて

あしやのさとに衣うつ也 義秀

淡路夕照

あハちかたあハと見るめもなミの上に

ゆふひくれゆく秋のうききり 績

紀路遠山

あしやかたミるめた、よふうききりも

はれゆくあとの紀路の遠山 たりほ

広田秋月

山ひめのおるやにしきのはたさへも

広田の杜の秋のよの月 嘉言

廿五日 つとめて、いとまをつくるを、なほいかてともと、め玉ひてあしや川のほとりまでしたひきて、

あしや川なみにおもハぬワかれとて

わたりもあへすそてそひちぬる あるし

かへし

あしや川さ、れこすなミしきくゝに

とはまくほしき君かやとかな 嘉言

かへりみかちにたちわかれぬ、けふハ明石までとかねておもひおきてたれハ、ひたみちにいそきて申の時ハかりあかしちかくなりぬ、一の谷、舞子かはまなとけしきいとよし、あしつかれたれハこよひハこゝにとてやとる、此家の見わたし、なみハたゝこゝもとによせて、あはちしまハたなひらにかきとることくみゆ、浜辺ハよきほと松ともたかくみしかく、たちなミたるさまいへハさら也、

あかしかたなミしつかなる夕なきに

あまのあひきの声きこゆ也 たりほ

てにとらハとるへくみえて夕きりの

まよひも見えぬあハちしま哉 嘉言

まゆひきのあハちしまねをこくふねの

ほのかにみゆるあまのいさりひ よしひて

ふけ行まゝに浪音たかし、

浦風にゆめさまされてうちよする

なみにうきめをかりまくらかな 足穂

廿六日 よへよりあめをりくゝふりてこゝろもとなかりつるを、あさあらしに雲間みえそめて、あさひはなやかにさしいてたり、いとうれしくてや

かて人麻呂の御社にまうつ、

〔上欄〕本朝文粹寄重務繁□□

ことのはの道のひしりとすへらき

おもきよせあるかみそたふとき 嘉言

くれたけのよゝにさかゆることのは

みちをあかしのかみそたふとき 足穂

ちとせへしむかしもいまにあふかれて

たちさかゆなることのはのかミ 義秀

をこなるすさミなれと、つゝりのそてもとおもふはかりになん、かへさハ千壺、須磨寺などへ行て海原を見わたして、

すまの浦やなミのよるくゝあまたにも

あかてや月にみるめかるらん 義秀

浦とほくこきゆくふねのほにいて、

すまのうへのにまねくをすゝき 足穂

きのふのひたみちなりしにこうしておのれハ哥もいてこす、たそかれに兵庫にやとる、

廿七日 道しるへやとひてわたのみさきをはしめ、名あるところくゝをめぐりて生田の御社にまうつ、それより山路わけ入まゝに布ひきのたきにい

つ、こゝに季鷹県主の立られたる石ふミあり、立ぬはぬきぬにしあれとた

ひひとのまつきてみるやぬのひきのたき、とあるを見て、

おりそへてたれさらすらんつゆしもの

秋たにそめぬぬのひきのたき 足穂

いくよゝを經てかゝらん山ひめの

たえずさらせる布ひきのたき 義秀

水上ハとほやまひめのでつくりと

みえておちくるぬのひきのたき 嘉言

こゝより山越にありまにこゆる道いとけはしく、わきみもせてゆくを、

ひとりのミたてるやまちをつゆにたに

こゝろもおかぬきみそつれなき 足穂  
とをみなへしにかきつけてミせけれハ、

よしさらハこゝろおくともゆふつゆに

ひもとく花をいかゝたのまん 嘉言

くねりかましやなといふもをかし、日くるゝほとゆふきりたちぬ、やとハ  
なくしてと、義秀がわひ声にうめくも折からあハれ也、からうしてありま  
にいたる、こよひハたれもくこうしていたつらにふしぬ、

廿八日 おもひしより日かすかさなりつるを、家ひとのいかゝまつらんと  
おほつかなく、道いそかれておち葉山も見す、されと鼓かたきハ舞子かハ  
まのめうつし似つかハしからんなど、あまれてゆくさくらのもみちめてた  
く、ふてもおよひかたし、

もみちはのちらましをしも吹まよふ

つゝみかたきのミねの秋風 義秀

たきの名をかくして、

おりたてるそてにたもとにミたれつゝ、

つゝみかたきハせゝのしらたま 足穂

さくらのもみちのちしほなるをたをりて、

秋さへもまついろにてゝちること

はやまのもみちあハれとハみよ 嘉言

かへし

あハれてふきみかことはの花さへも

さくらのもみちにるものそなき たりほ

かくていそきにいそけと道はかゆかて、神崎のわたし過るほど日くれたり、

ことならハこの萩原にたひねして

つまこふしかの声をきかハや 足穂

やうくきたのちかくなれるにともしひにきは、しく、このひころめなれ  
つる山路にやうかハりてめさむるこゝちす、松屋町といへる所にて、足穂  
が足にふミいたせるまめといふものつふれたりとて、いたミわふめるを、

いたしともさのミなわひそ足ひきの

こや山つとにあさりえしまめ 〔嘉言〕

うち興するわれもおなしさまにて、杖にたすけられて家にかへりつきぬる  
ハ戌の三つはかりになん、 村田嘉言



〔播磨路の日記の首部 (藤門雑記 第五冊)〕

播磨路の日記 (荒木美穂著 岩崎美隆写)

天保九年といふとしの四月、今西祐義の君ともちひとりふたりあひかた  
らひて、播磨の国へものしたまふに、おのれ二もあなちにいさなひす、  
め玉ふに、もとよりこゝろしりのひとくなれハ、いと興あるたひちなら  
んとまつこゝろゆきていとうれしう、さらバもろともにと出たつ、十日あ  
まり一ひの日、あさのほと空くもりてあめふりぬへきけしきなれハ、しは  
しためらふほど時うつりて午のときハかりに難波にいたりぬ、そこよりゆ  
きくゝて野里川といふところにて、

底きよき此川岸の柳かけ

夏なき水の色をみせけり

このわたりを過てつくだ川といふ所にいたりぬ、

ゆく末を心にかけてつくだ川

うれしき瀬をもワたりそめけり

夏の日の光なかれてつくだ川

ワたりす、しきゆふ風そふく

尼崎をすきて一里ハかりゆけハむかふ川といふところあり、此あたりハ海  
もちかくていとけしきよき所也、むかふ川ハむこ河をよみなまれるにやと  
もおもへど、ものふかくもたとりしらで、中々なるさかしらせんハをこな  
るへけれハ、すべてかやうの名どもハ里人のいふかま、にしるしぬ、

水か、みこゝろの底のちりもなく

むかふ川せの松のむら立

板橋のほそきこゝろのあやふさも

ワすれてむかふ夏の川波

西の宮ちかくなりて日もやくれか、りたるに、空のけしきもた、ならず、  
風さへ吹まよひて波のおとおろくしうきこえけれハ、

雨からのあやめもワかすゆふあらし

袖にたもとに吹まよひつ、

こゝろさへちゝにくたけて薄墨の

ゆふなみ高し磯の松風

くれかたに西のみやにいたりつきて、紺屋某家にやとりぬ、

十二日 朝とくいて、戎の御社にまうつ、さて甘町ハかりゆけハ上り道、

下道とて二すちの道あり、上道ハ西国へゆき、の大路にて、下道ハ浜辺を

ゆく道也、こゝより一里ハかりゆけハあしやの里にいたる、

海山ののそみもちかくあさつくひ

のとかにはるゝあしのやのさと

このあたりよりいそへを行二、朝日の波にうつろひたるに大なるちひさき

舟どものゆきかふけしきなど、えもいはすおかし、

おほそらのミとりもはれて百舟の

ゆくへしつけき浦の朝風

このあたりにもとめ塚あり、あしや道満の塚などいふもあり、なほ浜辺を

ゆけハ灘といふ所にて、酒つくる家ともめさましまて立つらなれり、浦

人のあひきするなときやうある見もの也、こゝを過てみるめの社にい

たる、この所ハ海のほとりにていとけしきよし、

浦の名のみるめよろしもやしほちの

おきつ波間にうかふもゝふね

このみるめといふハ古き書にみぬめといふ所にやあらん、されど例のきく

がまゝなり、猶ゆきくゝて新在家といふ所にいたりてはしいこひぬ、こ

の所に明善寺といふ寺あり、あるしの法師哥よむ人とき、けれハ立よりて

うたこひけるに、書たるものひとひらもなきよし、はしたなういらへけれハ、

ひと声のなさけハもらせほとゝきす

うきよのちりハよしいとふとも

かゝれと此ほどみたりこゝちくるしきよしひてかへしもせさりけり、生

田川にいたりてまつ御社にまうつ、杜のこたちなとかうくしう生茂りて

いとたふとし、

いくた川なミのおとさへこゝもとに

すゝしくかよふ杜のした風

このみやしろのほとりにゑひらの梅、梶原の井などあり、

うつしけんかけこそみえね今も猶

その名くもらぬ水かゝみ哉

こゝをすきて湊川にいたりて楠公の御墓にまうつ、

みなと川かゝるうきせにつくしけん

きみかまことそたふとかりける

神戸といふところを過て兵庫の津にいたりぬ、こゝハ名たゝるみなどにて、

ところもひろくいとにきハ、し、このみなどより西南に和田のみさき、ま

た生駒山などはるかにみワたさる、

もゝふねのこゝにつとひて行かよふ

むこのミなとそにきハへりける

かくて此所の築山辺の御堂、あるハ清盛の塔などそこゝと見めぐりつゝ、

こよひハこゝにやとらんとかねて合おもひけれど、まだ申の時ハかりなれ

ハ、こゝより須磨へハワつかに一里ハかりの道なるを、月見かてらかしこ

にこそとあひかたらひつゝ、こゝをたち出て野田村といふところにいたる、

道のかたハらに忠度の腕塚とて松一本たてり、

あハれよにかひなくきひしついのよを

しのふにあまる松のいろ哉

やゝくれんとするほどに東須磨といふところにいたりぬ、このあたりの人

にやとのことあないするに、このところハあひの宿とかいひて、旅人など

ハかたくいなひてとゝめすといふワリなきわさ哉、こゝより明石へものせ

らんハ道のほと三里ハかりありていとほし、さりとてもとの道へたちかへ

らんもすゝるなり、いかにかせましといひしらふほとに月出たりかし、さ

らバこの光にきほひて明石までゆかんとさためて猶ゆくゝ、

行かれてやとかるよしも夏くさの

つゆ踏まよふ月の下道

たちならふいそ山松のかけくれて

ゆふ波しろく月は出けり

松原をゆくほどほと、きすのなきけれハ、

ワれもさハまくらやゆハんほと、きす

こ、をとまりとねをそなくなる

舞子の浜をゆくほどのけしき、ことにいて、ハなにとかハいはれん、され

とこ、ろもす、ろなれハひたはしりにはしりて、やうく亥のときハかり

に明石の大くら谷といふところにつきて、石や某か家にやとりぬ、

十三日 人麿の御社にまうつ、御あらかいとたふとく御前ちかく国の守の

たてたまへる石ふみなどあり、この所ハ北ハ高き山にて、あハちしまの海

つらなとめのまへにみえワたりぬ、

よきほとに風やおふらん真帆たかく

右に左にとほさかり行

百ふねのほかけはるかに心さへ

おきつしまねをゆきめぐりつ、

ほのくどけふるしほけ□とほしろく

なひくあかしの浦の朝和

こ、よりかにか坂、大窪、長池などいふ所を過て別府といふところ

にいたる、御社ハ住吉の大神にて御前に手枕の松たてり、浜の宮といふところ

にいたる、御社ハ天満天神におはします、八町ハかりのほと松原にてけしき

いとよし、かくてをのへにいたる、御社の前ちかく尾上のかねあり、相生

の松などいふもたちさかえたり、このあたりより日もくれちかく空のけし

きもくもらハしけれハ、いそきつ、高砂にいたりて大工屋某が家にやとり

ぬ、このやとより少し南に天満天神の御社あり、御前に高砂のまついとう

るハしうおひひろこれり、

高砂のまつゆふ風打ちしめり

くる、うらハの浮舟の空

おきつ風吹やハらきても、ふねの

とまりしつけきたかさこのうら

十四日 よひより雨ふりいて、はる、けしきもみえず、かくてあらんもい

とさうくし、このあたりの名ところをもたつねハやと、あるしにか

たらひて石の宝殿にいたる、けにもき、しにたかハすおほきなるいはほあ

りて、前に住吉の大神をいつきまつれり、また此あたりをかも山といひて

いはほおほく、そのひまより松などおひいてたるさま、絵にかきたらんや

うなり、この所にしはしいこひてほと、きすハいかにとふに、さりやを

りくハなどいふもゆかし、

人つてハおほつかなきを子規

たかためならぬひとこゑもかな

こ、より二十町ハかりへたて、曾根の御社に詣づ、松杉などおひしけりて

もの、さま神さひたり、御前に曾根の松おひしろこれり、このころこの御

社に開帳といふことありて、並樹のひまに芝居、軽業などいふもの、かり

屋つくりたるがいとにきハ、しきさまなれど、けふハ雨にさハりてまうつ

る人もみえず、そこらかこへるたれむしろなども、うちしめりてすさまし

けなり、かくて高砂にかへりてまくらをかる、

十五日 けさも猶雨やます、されとかくてのみあるへきならねバ、ものど

もとりした、めて、けふよりかへさの道にこ、ろざす、

ふる雨のミのしろ衣ほしあへず

いと、つゆソふワかたもと哉

をのへ浜の宮、別府などハきのふみしところにてこ、ろもとまらずいとと

く打過ぬ、野口といふところへ来れるころやうく雨もやみけれハ、こ、

にて某か家にしはしやすらふ、この家の障子にたんさく、色紙、形紙、絵

などあまたおしたるを見居たるに、このあるしハみやひのかたにもほのめ

いたる人にやあらん、ものかたりのついでにたにさくとうて、あなかちに

こふに、いなひんも中々ひとかましくやと、すなハち筆とりてかきつけた

る、この宿をふちやといひけれハ、

たれもかくなひきよるらしふちかつら

なかくさかゆく花の下かけ



こゝをたちてゆく、明石などをも過て、申のときハかりに舞子の浜につきぬ、一日の夜のみめにハやうかハりていとくめつらし、西に明石、江しま、南東に難波の海、紀路の遠山などハるかにみえワたりたるけしきめもこゝろもおよばす、

ゆふくれのけしきをそへてなひきけり

むかふあなただの山のはの雲

須磨ちかくなりて敦盛の塚にまうつ、こゝに童の居たる、この所のしるへせんといへバこれをさきにたて、山路にかゝる、左の方松のしけく生たる所を内裏のあと、いへハ、

しつむへきつひのとまりとたとらすて

こゝをみやことおもひしめけん

またたつみのかた関屋の跡とて松生たり、

すまのうらやふるしせきやのあと、めて

今もやすらふ松の下かけ

熊谷か扇の松、鉄かワかみねなどをしへられつ、須磨寺にいたれるころハ、日くれハてたり、されどたゝにやハとて寺にせうそこして、古きものともなにくれととうてさせて見などして立出ぬ、この東須磨といふところに西月といふ誹僧（びそう）あるよしかねてき、おきけれハ、やとのことなとかたらひかてらとふらひけるに、あるしハ此三とせハかり旅路にありて留守にハ尼ひとりをり、いふかひなきこゝちしてたゝんとするに、このあまいと心あるひとにて、なにくれとねんころにかたらひつゝ、これかするへにてこよひハかさや某か家にやとりぬ、このあるしもなさけある人にてまめやかにあへしらふ、こよひも月もいとよし、こゝより行平の中納言の月見の松へハいとちかし、いさたまへ道しるへせんといふもいとうれしく、もろともにたちいて、道々やかてかしこにいたりぬ、このところハこたかき山にて、松二三本生たり、後はひよとりこえなとうちつゝきたる山にて松の色若葉のミとりうつくしく、まへハ海つらにて舟のともしひなといとかすかに月の光にあらそひたる、えもいはずおかし、をりしも子規鳴てワたる、

こゝにきて月みるたにもうれしきに

山ほと、きすなくねそへける

きのふにもやと、ひワひし恨さへ

はる、こよひの山のはの月

人伝もうハの空ニハあらさりき

月のまへ行山ほと、きす

このあたりの山をいなハ山といふとか、さるハのちの世にことこのむものゝ、かの中納言の哥にあハせてつけたるなるへし、されとをりつきなからねハ、

ほと、きすワれもいなハの山のはに

たちワかれうきねをハなくなり

夜いたう更けれハ今ハとてやとりにかへりてふしぬ、

十六日 朝とくたちいつ、こゝより布ひきの滝、有馬などへおもむかんといそきつゝ、むこのみなどをもあとにみなし、神戸にてひるけくひてやかて布ひきのたきにいたる、けにも名におふことくいほはたかくたちつゝきたるひまより、五ツきだにおち来るさま布をひきはへたるやう也、

松風（しょうふう）のこゑもなかれてぬのひきの

たき波（なみ）きよくおちたきりけり

いかにしており出しけん白波の

ちひろにかゝるぬのひきのたき

こゝより有馬へゆくほど滝谷越といひて、みちのほど三里ハかり山路にてひと気もなし、かくて谷上といふ里にいたる、このあたりにうの花のさきたるを、

ほのくゝとうの花さけりゆふつくひ

さすやわか葉の山かけの里

こゝより有馬へハ猶二里ハかり山路なり、

うれしくもむかひ立けりこゝろあての

山かけちかき松のひとむら

やうく日のくる、ほと有馬につきて大黒や某が家にやとる、この所は家  
居などことに高く立つらねていとるハしく、くにくのひともたちつと  
ひたり、みもよき女ともなともあまた見えてにきはへるさま難波にもをさ  
くおとるましよう見ゆ、くれすくるほどゆあみなとしてふしぬ、

十六「七」日

有馬山あけゆくも、めのまへの

ミねにおさまる松のあさかせ

打ワたすワか葉のつゆの朝つくひ

す、しくはる、夏のいろ哉

よひの雨のつゆしめやかにかねのおとも

明るまぐらの山かけのさと

あたりくみめぐりつ、善福寺といふ寺にいたる、この寺にめてたき物の  
具ともあまたありときけハ案内して見る、阿弥陀堂の釜、菅公の御筆の跡、  
豊臣の関白のせみの絵、利休居士のかけるものなど何くれニおほかり、  
つ、みかたきにいたる、むかひハ山たかく前ハたきのなかれ也、河のワた  
りひろくいとけしきよき所にて、道のほどさくらおほし、

つ、みてふ其名やいつこ松風も

むせひておつるたきつしら波

山さくら花より後のしつけさハ

若葉にかせのなひく也けり

鳥地獄、虫ちこくなといふ所を見めぐりてこよひもこ、にやとりぬ、

たくへゆくけふりのすゑも有馬山

ほのかにくる、みねの浮雲

十八日

有馬をいてたちてくる

難波への道をさして来るにて壺里ハかりこなたに屏風か岩といふあり、う  
たて川なませの里なといふをすきて中山寺にまうつ、日くれんとするほと  
なにハにつきぬ、さてこ、にやとりて、

十九日のくれかたに家にハかへりぬ、

荒木美穂

(付)

大國克子さんを偲ぶ

平成十九年三月五日、大國克子さんが心臓の病のため急逝された。初雷に打たれたように驚き、言葉を失った。つい前日、電話でお元気な声を聞いたばかりだったのである。

右に翻刻紹介した紀行文二種も、実は大國さんの担当による釈文で、まさか絶筆になるうとは思ひも掛けぬ事であった。何故こうも俄に旅立たれたのであろう。

振り返れば、未だ「手紙を読む会」と称する以前、単なる勉強会の段階で初めて会合を持ったのが一九八六年の秋、大國さんの外僅か二名の集まりであった。それから二〇年、凡そ年一〇回程度の会合で今日に至ったのである。ムムバーは図書館員、退職者、そして有志からなる一〇名前後で推移してきた。

発足後数年して、主に大坂及び近辺の国学者、歌人達の手紙を取り上げるようになった。村田嘉言、岩崎美隆、伴林光平、村田春門、藤井竹外、加納諸平等の書簡がそうであるが、外には「明石のうらつと」(村田嘉言編著)、「播磨路の日記」(荒木美穂著)、「熊野日記」(中西多豆伎著)などの紀行文へも範囲を広げ、やがて「鹿田松雲堂宛明治文人書簡」が『図書館フォーラム』創刊号(一九九五)に翻刻紹介されるに至った。爾後毎号に互り同様に掲載されてきた。

その間にあって、常に中心的役割を果たされたのが大國さんだったのである。立案、取り上げる資料の選定、釈文への意見、実地の調査、仕上げの諸事項に対する懇切、そして歯切れのよい裁定など、まさに名キャプテンの風を備えておられた。

いつであったか、そのキャプテンがふと話されたことがある。図書館にはどうしても主題専門員(subject specialist)が要る、どうすれば其の人を得られるか、大きな課題なのです、と。収集整理課長、図書館次長職に

在任した期間、大國さんほど多くしかも極めて秀れた個人文庫、特別コレクションの受入れに係わった管理職者は、他にいないであろう。

鬼洞文庫(出口神曉氏)、内藤湖南・内藤伯健文庫、長澤規矩也文庫、中村幸彦文庫等の個人文庫をはじめ大坂文芸資料、芝居番付、大坂画壇資料等の特別コレクションがその主たるものであるが。

こうしたコレクションを含み、総数二〇〇万冊に及ぶ蔵書を有する図書館の管理職者は、一体何を感じ何を思うのであろうか。「手紙を読む会」を組織し、又日下教授のもと韓国語の勉強会、満州語の勉強会を始められたのは決して偶然ではない。大國さんは何の臆することもなく、時に楽しみながら大海原に向って乗り出されたのである。

膨大な図書群を前にし、或いは背にして考え続け、走り抜けた人、それが大國さんのお姿であった。今は彼岸の真人、景仰して合掌。

森川 彰(手紙を読む会)